

「あなたはどこにいるのか」

ルカによる福音書 第15章1節～7節

説教 村上修平牧師

今日は父の日です。私は父から、仏壇や神棚に手を合わせて拝むことを教えられて育ちました。高校生の時、ある願い事があって自分から真剣に祈りたいと思いましたが、祈ろうと思って仏壇の前に座ると、一体自分は誰に祈っているのか、祈る相手は神様なのか、仏様なのか、ご先祖様なのか、疑問になりました。父に聞いてみると、『分からない』と言われて大変がっかりしました。この私の願いを誰に向かって訴えればよいか分からなかったからです。しかし、大学の友人に連れられて初めて教会に行き、そこで聖書に出会いました。聖書の冒頭に、「初めに、神は天地を創造された」（創世記1章1節《新共同訳》）とあります。山の神、川の神がいるのではなくて、山も川も世界の全てを創造された「神」がいる事を知って衝撃を受けました。

この世に偶然生まれた人は一人もいません。天地を創造された神様は、私たちが生まれる前から愛し、かけがえのない存在として創造して下さいました。主イエスはこの神様のことを、「天におられる私たちの父よ」（マタイによる福音書6章9節）と呼ぶようにと教えて下さいました。もしかしたら、地上の父は私たちの話を十分に聞いてくれないかもしれません。しかし、私たちには祈りを聞いて下さる「天の父」がいるのです。子どもが自分の父親を呼ぶように、神様に向かって親しく『お父さん』と呼びかけてみて下さい。そうしたら、神様は必ず応えてくださいます。父なる神様は、私たちに必要なもの、私たちが今、何を求め、何を悩んでいるのか、よく知っておられるのです。

けれども、私たちは地上の父親のイメージや自分の思い込みによって神様を捉えて、神様を誤解していることがあると思います。そこで、主イエスは、神様の本来の姿を示すために、私たちの所に来て下さいました。ルカによる福音書15章には、羊飼いと百匹の羊の譬が出てきます。主イエスは、「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで探し回らないだろうか」（ルカによる福音書15章4節）と言われました。神様は、迷子になった一匹の羊を捜し回る羊飼いのようであると教えて下さったのです。この羊飼いの姿は、讃美歌の中にもあります。

1. 小さい羊が家を離れ、ある日遠くへ遊びに行き、花咲く野原のおもしろさに、帰る道さえ忘れえました。
2. けれどもやがて夜になると、辺りは暗くさびしくなり、うちが恋しく羊は今、声も悲しく泣いています。
3. 情けの深い羊飼いは、この小羊の後をたずね、遠くの山々、谷底まで、迷子の羊をさがしました。
4. とうとう優しい羊飼いは、迷子の羊を見つけました。抱かれて帰るこの羊は、喜ばしさにおどりました。（讃美歌21-200番）

神様は、私たちの犯した罪を一つ一つ追求し、厳しい罰を与えようと待ち構えている「父」ではありません。神様は、どこまでも情け深く、優しい「父」なのです。私たちがどんなに神様のもとを離れても、神様は私たちの後を尋ねて、見つかるまで私たちを捜し求めて下さいます。私たち一人一人は、神様にとって、かけがえのない大切な存在だからです。

《悔い改める》という言葉もよく誤解されています。厳しい父の前で恐ろしさに震えながら謝罪することが、《悔い改め》ではありません。迷子の羊が、羊飼いの肩に抱かれて、心から安心している姿が、本来の《悔い改め》です。それは、羊飼いの優しさや憐れみが胸に迫ってきて、まるで心が躍り出すような喜びの中で、神様の愛に立ち戻ることなのです。

主イエスは、自分は悔い改める必要がないと思込んでいるファリサイ派や律法学者たち、つまり、自称「正しい人」（15章7節）に向かってこの譬を話されました。彼らにも悔い改めてほしいと願われたからです。彼らは、羊飼いが来たのに、『私は大丈夫、あなたの助けはいらない』と羊飼いの助けを拒む羊のようです。私たちも、神様の肩に担がれながら、神様の愛を拒み、自分の力で罪を克服し立派になろうともがいて、疲れてしまうことがあると思います。神様は、私たちがいつでも《悔い改め》に招いておられます。徴税人や罪人が、話を聞こうと主イエスのもとに繰返し近寄ったように（15章1節）、主イエスの助けを素直に受け取りましょう。羊飼いの肩に抱かれて、その愛の中で憩わせていただきますよう。

（記 村上修平）